その日のありて

押し花の向日葵はsUNの形して西海岸のひかりをまとう
有刺線の外に炎（ひ）のごとゆれている五月のポピーは君を誘う
プリズンの芝に水撒く昼下がり素足にこそばい自由というは
銃規制のいまだかなわぬこの国よ銃口（ガン）は誰にも向けられており
頭垂れふかき祈りを捧ぐ日の君の背にふる海よりの霧
独房に「I'二 Be Home」の流れきてホームなき身の聖夜が痛い
クリスマス・キャロル奏でる口笛を終えて真向かう獄壁の闇
やさしさに触れてみたき日膝の上（え）に富弘の花・詩画集のあり
プリズンの庭より摘みしなずなかなふればちりちり春のこぼるる
母のこと、ふるさとのこと綴る夜の君の日記は望郷一色

夜の更けて独りアルバムをめくる指君に確かな時間（とき）の流れる
君描くグッピー・小鳥・りす・うさぎ生命（せい）あるものの瞳はやさし
父と娘（こ）が手をつなぐカード送りたりせめてひと日を父となりえよ
手作りの封に残れる線のあり刃物もつこと禁じられいて
プリズンの検閲印の雪に濡れ紅き涙のごと手紙くる
余白なく書き綴られし便箋の終わりに続くP.Sのあり
君よりの手製のカードに悠悠と鴎舞いおり無限の空に
有刺線の間（あわい）に遊ぶ野良猫を胸に抱きて孤独分けあう
プリズンの堅きベッドに独り座し歌詠む夜は闇に親しむ
〈イチローに似ているという〉ひたすらに寡黙にめざすその日のありて

バックパック背負う子ら

始業ベル止みても貨車の列つづき春の大地のゆっくり目覚む
子らの名を呼べず戸惑う新学期　涼生・颯斗・祥衣・聖羅・花楠
名を呼ばれ少しはにかむ十歳の出席簿に続く十九の〇
なれぬ手で辞書をひもとく生徒らの指より生れる六月の風
生徒らが騒げばジャンプしまた眠るチンチラのいる授業風景
うすみどりの孵化の過程を見終えし子歓喜をつたう言葉の前に
赤白の声援つづく空のもと無垢なる子らが大地を駆ける
帰国の子抱けばいまだ幼くて両手に触れる肩甲骨あり
「母さん」とふいに呼ばれてふりむけば日焼けした子が戸惑いており
手作りの紙のヒコーキ飛ばしつつオハイオの風に吹かれいる子ら

生徒らのぬくもり残る教室に白い飛行機擦り切れており
一心にコンパス回す子らの指　円形模様の夢つなぎゆく
適応と異文化の壁はねのけてバックパック背負う子らくる
少しだけ母国知る子が指を折り三十一文字の世界にふれる
国籍も背景も違う子を前に絶対・相対の評価にゆれる
帰国児の母のＥメイル真夜にきて海に漂う「不適応」の文字
子ら去りし借り教室にチンチラは前足そろえまどろみており
五百余の書き初め並ぶホールより初志の香りの漂う朝
こなゆきの舞うフィールドに少年は駿馬のごとく白球を追う
黒板に残る日本語の文字を消し夕日に染まる借り校舎出る

川辺の小児科医院

診察の窓辺明るく川の辺の石を伝いて子鹿がゆけり

冷蔵庫の真中を占領（しめ）しフルーワクチン隅に置かれて卯月となれり

真裸のみどり児四肢を伸ばしつつ父母の見つめるこの世に目覚む

新生児の頭髪（かみ）の豊かさ黒さをも誉められておりアジアの子ゆえ

乳児去り診察室に入りたればほのかに母乳（ちち）の残り香のあり

両脚を紙のシーツにすべらせて声たて笑う健やかな児は

子育てのまぶしき日日を見るごとく「成長グラフ」の点たどる母

「かあさんの hug とおなじよ」三歳の子に言いて巻く血圧の帯

何冊も絵本を重ねまた崩し待つこと知らぬ患児ら遊ぶ

父の胸に患う耳をふかく埋めベンは漏らさず問診を聞く

幾たびも注射の液を吸う日日の人差し指に胼胝（べんち）生まれる

三本の注射とおもちゃを積むワゴン引きて目指すは五歳児の診察室（へや）

注射後の泣く子をあやすパパとママ若ければ歌い共にダンスす

三割は予防注射を受けられぬ貧しき政策この国にあり

ちさき背に四十二種の抗原（アレルゲン）を押せばかつての吾子よみがえる

真夏日のポプラのようにすくと立つ子を仰ぎつつ計る身長

痩せ症の少女の黙す診察室菜の花の首折られしままに

ドクターの椅子に跨り部屋駆ける子はＡＤＨＤの診察を待つ

ワクチンの不足ゆえ児を選別す豊かな国のフルーシーズン

ひと日終え待合室に散らばれる絵本に淡き夕日射しおり

帰化

唐突に墓地買わぬかと電話あり死ぬ国さえも決めかねる吾に
無口なる夫が夕餉に突然に解雇となりしこと話し出す
ガレージのボタンひとつで吾のひと日車ごと吐かれ車ごと飲まる
娘の投げしパスタ天井に貼りつきて「ゆであがりOK」とシェフのごという
帰化という申請を難なく書き終えて吾子は忙しく合宿に発つ
母と子がひとつ屋根の下国籍を違えて生きるされど母と子
市民権取りし子の未来思う時わが内に燃ゆ不戦の言葉（ディプローマ）
ミドルネームなき名の呼ばれ若者は芝を踏みしめ卒業証書 受く
着ぶくれて朝霧に立つストライキの群はひとつの覚悟を抱く
摩天楼を夢と仰ぎて着きし島移民の悲史を波音に聞く

この国の言葉解せぬ老い患者（びと）の末期を看取る貧民街に
ホームレスが立ちて金請う交差点病める都会の底辺の顔
ベランダをりすが尾を垂れ渡りゆく人より悲しき世のあるごとく
狂うほどにポピーの花野の風に揺れ流刑地の君のこころ騒がす
死亡時の連絡先をキッチンに貼りて生きゆくホスピス患者
モルヒネの服用の増しホスピスの患者の祈り深まる五月
夕暮れの淡き影曳き移民らが港の酒場（バブ）に母国語で酔う
残骸のごとき靴塚の前に立ちホロコーストの証人となる
職場にて心肺蘇生を習う朝テレヴィは死刑の執行を告ぐ
歳月は巡りて帰化をする明日湯上りの夜に「神田川」聴く

アジアの響き

うつくしいと思うは罪か艦上に挙手する男の指の先まで
黒は罪・赤は流血・黄は光　祈りに遠くJelly Beans食む
ハロウィーンの子ら駆け巡る空のした娘は酸素吸入に命をつなぐ
輪のなかにふと淋しさの陰る子のこころを占める帰国の重さ
星条旗の横に日の丸高く上げ「君が代」歌わぬ卒業式終う
素足にて浜を歩けば青春は春潮のごとふくらみてくる
「イエスタディ」さざ波のごと流れきて春の渚となりゆく君は
河沿いの蜆の貝を踏みゆけば足にやさしきアジアの響き
風の日は移民の大工の声荒く風に負けじと釘打ちつづく
果てしなき農園（ファーム）に揺れる綿の花　はなしろければ奴隷史かなし

父逝くのメール音なく真夜にきて死は薄墨の海に漂う
桜ばなひかりとなりて降る河辺異土にひとりの葬送を終う
ポトマックに朽ちて残れる運河あり騾馬はこの世の船を牽き上ぐ
ふるさとの川に遡及する鮎のごと子はアジアへと旅にいでたり
空白の旅程を残し発ちし子の母の指先アジアを辿る
米袋担ぎて学舎に帰る子に受け継がれゆく移民の血潮
長き幕持ちて街路に叫ぶ衆まことに長き死者の兵の名
青芝に子の声ころころ転がして帰還のジョンの休日が過ぐ
青空に百年の夢紡ぎおりライト兄弟の生地に立ちて
百羽目の真白き鶴の羽広げ母は祈りの息を吹き込む

首輪をはずす

朝露に濡れる体を抱きやれば草の実こぼれる夏の犬より
ぴろぴろの犬のふた耳撫でながらほめて・しかって・ぐちって・だきしむ
ひときれの棒をくわえて帰りくる犬の鼻上に自負心の見ゆ
犬の眼にヒトは小さく澄みており暴力のなき栗色の眼に
夕暮れに二重の虹に遭いたれば犬の目線で頤を上ぐ
青年の周りに纏い鼻を寄せ白衣に染みる死を嗅ぎいるや
寡黙なる夫が犬に語りいるひとつ孤独を分け合うように
四マイルをわれと一緒に走りたるはちきれそうな心臓を抱く
ククククと寄せくる鼻の冷たさよ抱けば熱きけだものの息
いずこより湧き上がりくる甘声か魂しぼり雄犬を呼ぶ

げっぷ・おなら・くさめ・あくびによだれ垂れ尻尾ふりふりわれにつきくる
ピザマンがベルを押す音聞きたればテレヴィに向かい吠ゆる犬なり
傷口を幾度もなめて癒す犬　ヒトは己の傷を晒すに
氷雨ふる闇をくぐりて来し犬の魂までもぬぐいてやれり
新雪に踊るステップの軽やかに「犬のワルツ」は終わりをしらず
カルティックを聴きてうたた寝する犬よアイルランドの青に染まりて
細き脚ぬぐいてやれり雪の日の凍てる泥道歩みし犬の
ふた耳の奥まで熱く聴いていん　自爆・銃撃・炸裂の音
束縛を解いてやりたき日の終わりまどろむ犬の首輪をはずす
人の世の何をみつめて逝く犬かその時までを澄みいるまなこ

異土の鏡に

幼き日納屋に見つけし双眼鏡　父の記憶はひんやりとくる

戦果て消えゆくものはひそとゆく双眼鏡も父も消えたり

姿見にユニフォームのわれ映す朝口元きっと引き締めており

診察の波のひきたる昼休み鏡に向かい口紅を引く

紅を塗るホスピス患者は手鏡に窓辺の春をすくいていたり

漆黒の車体に咲きて散る花火この世の果てまで降りてゆきたり

オフイスの秋を映していただろう瓦礫と果てし９（ナイン）・１１（イレブン）

鏡見て天使のごとく笑う児が銃を持つなり規制なき国

弾痕に壊れし鏡をのぞきいる少女もあらんアフガン・イラク

卓上の鏡に散れる紫蘇の花ましろき秋がほろほろとくる

白髪抜くわれを見つめるわれのいて鏡は女の葛藤晒す
ウエディングドレスの着付け終えし娘は明日への一歩を鏡に映す
バスルームに一人化粧を終えたれば娘はアメリカン・スマイルをする
汚れいる鏡に角帽吊るされて医師となる子の卒業を待つ
しげしげと男は鏡をのぞきこみ歯間に詰まりし滓をとりいる
ふた耳のあたりに愁思ただよわせガラスのドアをよぎりゆく犬
夕暮れの自動のドアに映るわれトキと呼ばれてトキとなりゆく
パブリックとプライベートの顔をもつ人を黙して映す　鏡は
真向かえば過ぎゆきし人浮かびくる二十四年の異土の鏡に
漆黒の画面に映るわれと闇静かに折りてラップタップ閉ず

リンカーンを訪ねて

リンカーンの生まれし土地を訪ぬれば春の森ふかく啄木鳥響く
今もなお湧きて流るる清水ありリンカーンの生れし小屋の近くに
窓も無き丸木の小屋に生れし子はエイブラハムと名づけられたり
ケンタッキー・インディアナにと移れどもフロンティアの暮らし変わらず
貧しさをバネのごとくに育ちたる少年期ありインディアナ州に
原発の冷却塔（クーリングタワー）のそびえおり少年リンカーンの住みいし土地に
斧かつぎ口笛を吹く少年に出会えるような早春の森
この樹もて筏つくりしリンカーンか　サッサフラスは森ふかく立つ
リンカーンの筏漕ぐ音聞こえくるオハイオ河の土手に上がれば
「リンカーン通り」のレンガの道に立ち十九世紀の馬車の音を聴く

南部にて奴隷売らるるを見し日より少年の心占めいし「自由」
リンカーンの母若きままに眠りいる森の深くのパイオニア墓地
残されし一枚の母の肖像画　リンカーンの顔を重ねて見上ぐ
母そして姉失いし少年の「傷心」疼く　森を歩けば
暗殺に倒れしリンカーンの記念館建てしケネディその人もまた
深緑の墓苑に立ちて聞きており民兵の呻きcivil warの惨
地に低く無名兵士の墓並ぶ南・北の民よ安らかにあれ
リンカーンの彼の演説が聴こえくるゲティスバーグの空は清澄
彫り深き痩身の人を手につつみ飲みほす朝のマグカップあり
リンカーン生誕よりの二百年　民主の道のパイオニアなり

帰還兵

ゲートより降りくる一人の兵のおり未だ戦の匂いまといて
キスをされ花を渡され人間の顔に戻りてゆく帰還兵
リュックサック背負う屈強な兵の手にバラの一輪渡されており
旅行族の長く並べるゲート隅帰還の兵を囲む輪のあり
人の輪に囲まれフラッシュ浴びる兵空港ロビーにヒーローとなる
戻りこし命まぶしく囲みいる父・母・妻・子・友・同胞が
星条の小旗のゆれる水無月にジョンはイラクより帰還をしたり
父の脚にからまり遊ぶふたり子よ砂塵の国を歩哨せし脚
ふたり子の手をとり朝の散歩するジョンはイラクの帰還兵なり
銃持ちしその手で高く鞦韆（ぶらんこ）を漕げばひとりの父となるジョン

幼子の声の途絶えし一瞬にジョンは聞きいる炸裂・号泣

青芝に子の声ころころ転がして帰還のジョンの休日が過ぐ

爆ぜるもの花火にあればテロ・自爆しばし忘れて喝采をする

開戦時国旗掲げし家家がフットボールの応援旗かかぐ

父・母はイラクに発ちて残りし子フロリダの祖母に預けられたり

イラクにて散りし十八の魂送るダブリン橋は驟雨に煙る

長き幕持ちて街路に叫ぶ衆三千の兵の死者の名綴られ

またひとり目隠しをされ消されるを画像に見つめ朝が始まる

イラク戦小さきニュースと成り果てて死者の数のみ告げられており

星条の旗に包まれ還りくる無言の兵の無念をみつむ

死者に近き手

こんもりと明かりの灯る雪の夜の弔問の車ながくつづけり
葬儀屋にスカーフ・コート・手袋と生者は熱気を包み訪いくる
弔問のサインを終えしその指でミントつまみし　赤・白ミント
笑みうかべ長き弔問をこなしゆく死者に親しき遺族というは
葬儀屋に生者の音の研ぎ澄まれ人語・靴音・咳の絶えざり
六人の遺族と交わす握手なり死者に最も近き人の手
夫と娘の六人の手を握りしめ六つの悲しみわが手に受ける
最前の列のくずれて壁ぎわの画像に向かう弔問の足
靴音は暗き絨毯に吸い込まれ壁に明るき死者をみつめる
暗き部屋の黒き人山に囲まれて笑みを続ける画像の死者は

幼子を抱きカメラに笑む人よ　ホスピス棟に髪うすくして
逝きし人のヴィデオ幾度も流れゆく輪廻のごとく涅槃のごとく
フューネラル・ホームのドアの内に立ち死者の余韻をコートに包む
凍てる夜の芝に一歩を踏み出して死者より遠く離りてきたり
帰りぎわ気づきたること弔問にBlackひとり Asianひとり
葬儀屋のビジネスカードをてのひらに遅き夕餉に一人つきたり
マイナスの十度Fという。埋葬の温度を憂う生者というは
吹雪く日に凍土掘りいる墓守の白き息など思いていたり
凍てる土の底に柩の寝かされて雪は静かに死者を眠らす
机の上に葬儀屋のカード投げ出され風のごと過ぐ如月の日日

ハンカチ納む

写真撮り指紋を取りて入国の許可はおりたり同胞（はらから）の国

八年の時の流れを見にゆかん９（ナイン）・１１（イレブン）ののちの祖国を

同時テロの後のため息吐くごとく「日本食、もう送れないのよ」

春浅き桂の浜にたたずみて龍馬焦がれし蒼に染まれり

春くれば花の木下に集う民　戦無き世を歌いて酔いて

ふるさとを巨人が跨いで行くように第二東名の高架の進む

山峡の墓に詣でるおなごたち九十七を真中にはさみ

朽ち欠ける墓石も並ぶ二百年われにつながる祖先はおぼろ

妹はいつも控えめ焼きそばを食みつつ語る教育論も

一本ずつラップに包み売られいる清潔な国のバナナというは

十五年前と同じにほほえみて迎えてくれし重度障害児

訪れし学び舎に建つ教会の牧師らは皆ケイタイを持つ

初めてのやまびこ・はやて・ときに乗り祖国空白の時にゆられる

女学生の指より生れし文字溶けて車窓に流れるみちのくの春

金山の社宅の跡の枯れ原に風を聴き入る少年の夫

磐梯の温泉宿に浴衣着て同志のごとく杯を挙ぐ

祖国への旅の終わりは引き出しにふかくしずかにハンカチ納む

さくら見しことをひとつのみやげとし電子看護の日常に入る

花びらの漂うなかを散骨の義兄（あに） 逝きしとう高知の海に

へその緒が切れるごとくに落ち着かずパスポートの期限切れるこの夏

鳥

痛みいる羽根をしずかに休ませて風を聞きおり渡りの鳥は
エリー湖に幾千の鳥と出会いたりテロ警戒の国を逃れて
国境のなき空を舞う鳥のした人は銃持ち検問に立つ
エリー湖に拾いし白き羽根ふれば傷める先より真砂こぼるる
幾つもの国越えて来し羽根ならんビンゴゲームの生徒(こ)の手に渡る
羽化できぬ少女の背に透明な飛翔願望たたまれており
爪先を蹴りて夜空に舞い立てど開かぬままの少女の翼
また一羽高層の窓に激突すエメラルドブルーの罪を問いたき
プリズンの印の押されしカードには鷗舞いおり空の果てまで
幾たびもガラスに挑む駒鳥は己が姿に鋭(と)き眼をかえす

ペチュニアの陰にこぼれる種子に寄りひと日の幸を啄む小鳥

目玉焼きとなりゆくまでに思うことキジ目キジ科の鶏（とり）の営み

折り鶴に平和をこめる民族の語り尽くせぬヒロシマの惨

白鳩を幾度も空に放せどもわれらのもとに帰らぬ「平和」

爆弾を投下する国・受ける国　鳥に涙のながれる日あり

文鳥のぬくもり不意によみがえるレモンの色に秋の陽ゆれて

池の面の空を啄む青鷺のうなじより秋が始まりている

公園の巣箱は雪におおわれて人族のみが背を丸めゆく

帆に憩う鳥のごとくに帰化終えしのちの十年羽ばたき止まず

琥珀色に焼ける七面鳥（ターキー）を囲みつつ家族の綴る移民史のあり

陽に晒される

豊かなる国の南に極貧の島国ありて大地震(おおない)に遭う
ドミニカとハイチはひとつ島のなか貧しさのみを分けあいて浮く
雪掻きを終え着膨れて見続けしハイチの島の地震(ない)の惨禍を
空中の写真の捉えし地震(ない)像は塵芥(ごみ)のようなるポルトー・プランス
未だ暗き朝のテレビが映しだすハイチに横たう明るき死体
滑走路一本の国に入らんと他国の救助の波の押し寄す
「カメラマンより食料を薬品を」レンズに向かい島びと叫ぶ
犠牲者は静かに眼を伏せるのみ痛みを晒すカメラの前に
うず高き廃棄のなかに棒のごと人間の手が足が晒さる
十万の犠牲の数の日々増えてマス・グレーブとう響き悲しむ

麻酔無く足の切断される子の泣き声内耳の奥に残れり
片足を切断されし幼子の痛みの先の未来を憂う
七日間を瓦礫の下に生き伸びし老女が歌う神への賛歌
父母を家を失くせし少年は地震(ない)後遺症とう　眼動かず
八日目に瓦礫の下より救助されガッツポーズをとりし裸の子
ハイチへの寄付を唱える歌手らいて小額をせり夫とわれとは
水のみで十五日間を生き伸びし少女を担ぐ担架勇まし
ハモニカに合わせ体を揺する子の笑顔を見たり　地震２０日後
富裕なる国が極貧の国になす誘拐まがいのアダプト事件
映像のハイチはいつも明るすぎ陽に晒される悲しみのあり

再生の音

ブルックリンの橋を渡れば聞こえくるツイン・タワーの再生の音
水を売る男の声の響きあいブルックリン橋生活（たっき）の匂いす
空ボトルをカートに積みて眠りいる夢のなかでもホームレスなるか
ホームレスの眠る傍らバイカーがジョガーが行き交う週末の橋
９・１１の終わりなき世を立つポリス地下駅・ビルに・橋のたもとに
海の青・天井の青にただよえるツイン・タワーの虚像をあおぐ
グラウンド・ゼロを訪いくる人の群れシャッター押しおり九年のちも
アベニューにひしめく人の波こげば汗に紛れる人種の匂い
ペチュニアの花の溢れるレストラン十年前も河の上にあり
足袋をはき炉端に鮎を焼くシェフのうろこのような汗が光れり

ハドソンの河面に沈むうたかたの花火見つめる国民・移民
ＮＹＣの底に流れるペーソスかホットドックの大食い競争
訛もて英語で尋ねるドライバーにわれも応えり訛言葉で
摩天楼の狭間に生きる男女らに寄り添うごとく犬の生きいる
六月の兵の死者数百を超えアフガンの支持下がり続ける
ヴェトナムを破り記録を更新す何時まで続くイラク戦争
ファミリーを問われ果敢な兵士より涙湧くまでを画像にみつむ
都市の間に聞こえてくるは高層のビル解体と構築の音
地下駅の線路の汚臭を嗅ぎながら電車待ちおり寡黙の群れは
ブルックリンの橋を渡りて帰り来る自由の女神を左に右に

ちさきベートベン

あたらしき命の生れる知らせあり９（ナイン）・１１（イレブン）の痛ましき地に
児の生れる九月の空は青からんあの日の空を二度と汚すな
ソノグラムに逆さとなりて胎児浮くメダカのような顔をみつめる
ハツマゴとグランマという未消化の言葉抱きて待つ September
ユニホームのポケットに携帯しのばせて命誕生の時を待ちたり
与えられし自由と勝ち取りし自由　日・愛蘭の子が生れる
ニューヨークの河辺の街に生れし児の両親（おや）は国籍取得者なりき
生れし子のフォトが米・日・愛蘭に走りてゆけりスカイプに乗り
スカイプに生まれ落ちたる児が映るブルーのとんがり帽子をかぶり
両の手を反射のままに振りているみどりごはちさきベートーベンなる

指先より母となりゆく吾娘なるか人形のごと命をつつむ
ぎこちなくみどり児を湯に浸す娘よ　母からわれに流れる時間
老い人の顔を作りて泣きだしぬ一生（ひとよ）の夢を駆けているらん
夢の路に何を追いゆくみどりごか天使がふいに哲学者めく
ためらわず臍の緒捨てる吾娘なりしわれはタンスに保管（しま）いているを
みどりごはいずこの星より来たりしかうっすら蒙古の斑（あざ）残しいる
うつむきて父の胸部に眠る児よ類人猿の原始の態で
大いなる父の胸処に頬を乗せおまえにつながるリズム聞き入る
でこぼこのレンガの道を押しゆけばストローラーの赤子もゆれる
生きかわり死にかわりゆく多人種の街に生れし子お前も流転

屋根のある橋（Covered Bridge）

アーミッシュの荷馬車が過ぎてのちの時間（とき）抱きて静もる屋根のある橋
団塊の世代と言われ生きて来て胸にひとつの「神田川旅情」
我が子らがアメリカ市民となりし日は母は芯まで日本人となる
祖国では「かの八月」に浸りいて気怠きジャズに浸る吾の夏
兵役に署名（サイン）せし吾子は十八歳 戦さの杞憂母に始まる
ひたすらに楕円のボールを追う吾子よ兵役の署名を終えし日もまた
堂堂と握手して受く卒業証書（diploma）辞儀なき作法が若者に合う
口紅をキュッと引きいて今日ひと日戦う顔を鏡につくる

七人の敵にあらねど人種、性、の差別は常に真っ向から来る

ふた国に生きし感傷の跡などを英字となりし履歴書に捜す

ガレージの自動のドアが開かれて車ごとわれのひと日吸い込む

看取り場に Toki と呼ばれる我の名に淋しき朱鷺の舞い来る日あり

夕陽背に麦踏む亡母(はは)がふつと湧く 麦秋の文字を本に拾いて

肩書きを背負って生きても外しても淋しく生まれし男の背は

バックミラーにほおずきほどの太陽が望郷三分引っかけており

コーヒーの湯気の先より沸き上がる一筋の想い Thinking of you

春の夜の柔らかき乳房を包むとき花の形にてのひらあり

外挑む男の胸を火に染めてガラスの窓の花火が燃ゆる

もし君が向日葵ならばわれは影陽の匂い抱き石に静もる

校庭にひと日を揺れし星条旗鳥のごとく翼休める

自らの重みに落ちし枝打てば淋しき骨の裂くる音する

全力で生きているかと問うてくる終身刑の君の手紙は

封切れば乾いた煙草の匂いして刑務所(プリズン)に生く君を思えり

灯の下にサングラスの傷晒されて無数の傷もて人間(ひと)を見ており

モデリアニの描く女の顔かたち歪みを知らぬ愛一卵型

痙攣をしつつやがては死に至る蟻の一世(ひとよ)を思う一分

ビル街の冬の花火の消え際を雪しんしんと終幕を引く

人生はポケットのよう　捨てし我拾いし我が寄りて膨らむ

移民史の端につながる生もあり異国に残さんわれの足跡

この国の移民の悲史も秘めていん屋根のある橋川面に揺らぐ

異国の芍薬

わが内に移民、市民の定義なく胸に手を当て星条旗仰ぐ

一椀の餅にて足りる雑煮食み寡黙に暮れる異土の正月

三指に触れる脈拍数えつつ共に分け合う沈黙のあり

English を解せぬ患者の終焉に尼とわれおり言葉少なく

若き日の白衣のポケットの鍵の音こころ病む者の苦悩をしらず

鉄のドアに施錠せし音重く落ちこころ病む者の看取りを終える

この国の銃器の不幸とどまらず病み悲しみに人遠く生く

余白なき文に晒されしさみしさが不意に舞い込む五月の手紙

緑葉の騒立ち激しわがこころ君を想えば嵐（ストーム）にも似て

水銀の最上点がピクと盛り意識なき患者（ひと）の血圧を読む

胸郭を最大限に開かんと切なく逝けり　圧死者という

薄き胸の濁音を聴く吾の表情（しぐさ）逃さんと見入る患者の視線

患者逝き棚に残りし遺品類死より影濃く夕窓に浮く

「Good-by」　赤きカードが添えられて死者の胸元明るき柩

異人種を隣人として生きる国われは淋しく逞しくあり

学深め憂い深める青年の肩の辺りに漂う孤独

ほろほろとつまびき始めし子のギター日毎哀調の深まりてゆく

陽の匂い暮しの匂い満つレタス獄に生く君の州より来たる

ビル街の電光ニュースの飢餓の群砂漠のごとき瞳向けてくる

異国にて末期の患者を清拭す黙礼ののち蝉時雨聞く

若者の長き手脚(あし)に彫られいるスヌーピー淋しく一緒に揺れて

栗色の髪なびかせて走る娘(こ)の額の産毛金色の朝

寡黙なる人が爪切りし三日月の切片を拾う歳月ひろう

しなやかにしたたかに生く野辺の道異土の芍薬におやかに咲く

草いきれ、雁の北帰行　望郷は不意に来たりてわが芯を突く

日本語に飢えしころ見し「どですかでん」黒沢逝きて晩夏の深し

人ひとり見送りて出る喪の家の死を包みいる楢の紅葉

覆いたき虐殺の数多映し出す異国にて知る「南京の悲史」

追憶のかなたに棲みしひと追えば雪野にひとりの迷い子となる

ボルティモアの冬に傾く街角に着ぶくれて立つホームレスふたり

帰化の翼

ホームレスとサンタが札を掲げゆく都市はさみしき顔を泳がす

退屈の代価をもちて老い人がマクドナルドの窓辺に集う

海超えし老の英語は訛りもちここがわが国と地を指して笑む

四方の面（ミラー）異なる皮膚の映りいてエアロビクスに群れる人族

「スキヤキ」の流れて踊るエアロビクス望郷は汗となりて吹き出す

全身の血潮騒がせ踊り終え人は寡黙に夜の街に消ゆ

黒きチェリー・輪切りのバナナにミルクかけ人種のような cereal を食む

先住の民族の悲史の憂い秘め大地に坐して壷（ポット）売る老女

インディアンのピアスを耳朶に通すときわが内を駆くる民の血のあり

蜀禿のような月仰ぎ踊る民大地を踏みて神に近づく

オリーブが沈むガラスの瓶の底　使徒らの眠る丘を思えり

人間(じんかん)を泳ぐことつまり異文化を泳ぎてわれの顔をなすタ

Mango の山吹色の果肉食む甘きおおりの髭を愛する

娘の部屋に「タイタニック」の歌流るる航海は傷を負うことなりし

いつの日か医師となる腕が刈りてゆく芝の断面シュルシュル匂う

ボール抱き青きフィールドを疾走す　昔おとこは狩人だった

特別と区別と差別を嗅ぎわけてしなやかにまたしたたかに生く

睡蓮を眺め稚鯉に餌をやり移民はひと日の安らぎをえる

ガレージのセールで買いし仏陀の絵東洋の笑みをまなじりに溜む

封切れば乾いた煙草の匂いして獄の匂いとしるも悲しき

独房の壁に奏でるキャロルという聖夜の君にくてびるさみし

獄窓に餌(え)をついばみし鳥が去り君のあこがれは大空に消ゆ

われ見つめ一途に餌を食むリスに孤独かと聞く深緑の闇

ベランダの椅子に駆け乗りリスの耳緋色の森の豊穣を聞く

帆に憩う海鳥の胸しろき夏この地に帰化の翼をおろす

てのひらに鈴蘭をのせ頭垂るるホスピス患者の祈りのかたち

収容所に送られてゆきし貨車に乗りユダヤの民の慟哭を聞く

幾層の闇より聞こゆ叫びありホロコーストの靴塚の前

母国語で大いに酔ってみたき夜酒場の群れの饒舌のなか

夕暮れの酒場（パブ）に居並ぶアメリカン肩大きくて移民よりさみし